【研究ノート】

文集『荒川重理先生の思い出』についての考察

大　坪　素　秋

【要　　旨】

別府大学短期大学部の初代学部長を務めた荒川重理に関する調査で、本学附属図書館に残されていた文集『荒川重理先生の思い出』が、荒川の教育者としての優れた資質と豊富な経験を物語る貴重な資料であることを見出した。札幌農学校で昆虫学を学んだ荒川は、日本統治下にあった台湾の旧制台北高等学校において動物学担当として教育を行うことにより、日本と台湾の幅広い分野の人材育成に大きく貢献した。

【キーワード】

荒川重理　旧制台北高等学校　札幌農学校　趣味の昆蟲界　別府大学短期大学部

はじめに

『別府大学紀要』62号（新制大学創立70周年記念特集号）巻尾の別府大学学長飯沼賢司氏の寄稿文にある通り[1]、昆虫学専門の荒川重理（あらかわしげみち）（以下、荒川）（1884－1976）は、別府女子大学の生物学講座の教授を担当していた。当時の生物学講座は、文学部にあるにも関わらず、荒川の他に細胞遺伝学の土屋工（つちやたくみ）助教授と植物生理学の二宮淳一郎助手がいるという、いわゆる“完全講座”であった[2]。昭和25年（1950）に別府女子大学が開設されて、昭和29年（1954）に別府大学と改称されて男女共学となり、短期大学部を開設した頃の別府大学の創生期から10年ほどの在籍であったためか、荒川に関しての別府大学の資料はほとんど残っていない。本学の附属図書館に勤務していた吉岡義信氏が編集した、『新聞記事に見る別府大学の歩み―昭和21年（1946）～昭和40年（1965）―』にも荒川に関する記事は見当たらなかった[3]。

筆者が本学創設当時の生物学講座に興味を持ち、荒川に関する調査を行う過程で、生涯で4,000名にものぼる荒川の教え子のうち旧制台北高等学校（台北高校）の卒業生たちが「荒川先生の会」を発足して、荒川の死後一年の短期間に完成させた文集『荒川重理先生の思い出』が、「荒川先生の会」の永田英世氏から本学図書館に寄贈され、現在も３部が残っており[4]、そのなかに別府大学短期大学部の教員と卒業生に関係する部分を見出すことができた。本研究ノートでは、文集『荒川重理先生の思い出』の内容を紹介して、終焉の地となった別府大学の所在する別府での荒川の晩年とともに、別府大学以前の荒川の足跡をたどって、荒川が別府大学短期大学部の初代学部長となった経緯について調査を行った。

1　別府での荒川重理

昭和27年（1952）に当時68歳の荒川は生物学担当の教授として別府女子大学に赴任し、昭和29年（1954）に開設された別府大学短期大学部の初代学部長を昭和35年（1960）まで務めている。荒川に関する資料として、『別府大学の三十年』の「文学部と短期大学部の発展」のなかで、短期大学部の設置について以下のような記述がある[5]。

昭和二十九年二月、別府女子大学は、別府大学と改称され、男女共学になるとともに、同月、短期大学部の設置が認可されてその中に商科及び生活科が設けられた。
同年四月、この生活科は、厚生省によって栄養士の養成施設として認可された。初代短大部長には荒川重理教授が就任したが、この年創刊された学生自治会新聞の担当記者との対談で、荒川部長は以下のように述べている。

「四年間をもって完成教育とする日本の教育体系の中において、短期大学では二年或いは三年を以って一応の完成教育を成そうとされている。短期大学は、昔の専門教育と同じかというと、昔の専門学校は職業技術を身につける課程であって今日の短大とは少々内容が異なる。あくまで教養科目に重点を置いて、一個の社会人としての人間を形成する為の学校が今日の短大といわれる。職業基礎教育と一般教養科目と同時に学習するのであるから、四年生学部に比して学生に要求されるエネルギーは大きい。（中略）学生は、自信と信念とをもって学習に又運動に励んでもらいたい。」

さらに短期大学部の今後の方針について述べている。

「現在は商科と生活科とが開設されているが、これも社会の要求によって成立したわけである。大学の使命を達成するためにもっと範囲の広い科目をとり入れて行き、附設の保育科を幼稚園科、生活科を家政科とし、商科の学習設備を充実して完全なる職業教育のできる学園にしたい。」

70歳の高齢だった荒川が、別府女子大学の多くの他の教員とは異なり、前身の別府女子専門学校や地元の大分大学の出身者ではないにもかかわらず、新しく設置された別府大学短期大学部の初代学部長の重責を任されたことに興味を持った筆者は、昆虫学者の荒川についての調査を行ってみた。『別府大学の三十年』の「文学部と短期大学部の発展」以外の大学に関係する資料には荒川の名前は見つからなかったので、インターネット上の情報を検索したところ、文集『荒川重理先生の思い出』と『趣味の昆蟲界』の２つの書籍が確認できた。『趣味の昆蟲界』は100年以上前の書籍であって入手が困難であったが、文集『荒川重理先生の思い出』は本学図書館４階に３部の所蔵が確認できたので、閲覧を依頼して容易に手にすることができた。これが「荒川先生の会」の永田英世氏から40年近く前に本学図書館に寄贈されたものであることを永田氏の巻末のサインによって確認できた。文集『荒川重理先生の思い出』が別府大学短期大学部長であった荒川に関する書籍であることが、以下に示す通り、本学の関係者の寄稿文が含まれることから容易に判断できた。文集『荒川重理先生の思い出』の236から237頁にかけての「荒川重理先生略年譜」を図１に示す。「荒川重理先生略年譜」は、別府大学以前の荒川の足跡を辿る上で貴重な資料であっ

た。「荒川重理先生略年譜」以外の情報としては、「第二部　先生の思い出」のなかの特別寄稿の別府大学関係として、197から204頁までに、コロラド州立大学教授土屋工氏、別府大学教授二宮淳一郎氏、そして別府大学短期大学部卒の草野美沙氏、工藤隆子氏、渡辺小枝子氏による寄稿が認められる。その中の別府大学名誉教授の故二宮淳一郎氏の寄稿文の抜粋を以下に示す。

明治17・ 1・14	東京市に生まる
〃35・ 3・31	私立立教中学校卒業
〃36・ 5・ 1	札幌農学校農芸科入学
〃39・ 3・31	札幌農学校農芸科卒業
〃40・ 9・ 1	東北帝国大学農科大学助手
〃43・ 4・ 1	愛媛県東宇和郡立宇和農蚕学校教諭
大正 3・ 7・27	勝世夫人と結婚
〃 6・ 4・ 1	愛媛県立松山農学校教愉
〃 9・ 9・ 1	松山高等学校講師
〃10・ 6・17	栃木県立矢板農学校教諭
〃12・ 3・20	浜松高等工業学校講師
昭和 2・ 3・31	台北高等学校教諭兼助教授
〃 6・12・31	同教諭兼教授
〃19・ 7・18	台北帝国大学農学部講師
〃21・ 1・21	中華民国国立台湾大学教授
〃22・ 4・28	留用解除帰国
〃23・ 3・31	愛媛県立宇和高等学校教諭
〃27・ 4・ 1	別府女子大学教授
〃29・ 4・ 1	別府大学短期大学部長
〃45・ 5・15	別府大学名誉教授
〃51・ 2・16	別府市にて死去

図１　荒川重理先生略年譜、
文集『荒川重理先生の思い出』より

いま荒川先生がなく、土屋先生がアメリカに渡られて、荒川先生らに注ぎこまれた、生命をこよなく愛するその流れを保ちつづけておれるのかと、常に思うこのごろです。

やがて二年後、文学部単科のこの大学に、短期大学部併設の動きが始められました。大変な苦労の後、二十九年にそれが成功したのですが、その当初から、今思いおこせば十年の長い間にわたって荒川先生は、短期大学部長の重い重責を負って、いまの別府大学の基礎を打ちかためていただいたのです。私は、先生のもとに、学生担当の仕事を仰せつかりましたが、ことあるごとに、担任の私よりも先生の方が、学生一人ひとりの事情をくわしく知りつくしておられ、むしろ逆に指導の指示などを下されて、赤面したこと度々であったのを、いまもあらためて思い出してしまいます。

先生は、本当に学生ひとりひとりを愛しておられました。それがまた学生が先生を心からお慕いすることになるのは当然のことといえましょう。先生が大学をおやめになり、学生が卒業して以後も、絶えることなく必ず先生を囲んでの同窓会を、最後までつづけてきたのも、先生と学生との真の心の結びつきがそうさせたのでしょうし、（中略）

以上の二宮氏のものも含めて、別府大学関係者の他のどの寄稿文をみても荒川に対しての深い尊敬の念が感じられる。また、台湾にあった台北高校で荒川の担任のクラスの教え子たちが中心となって「荒川先生の会」を結成して、文集『荒川重理先生の思い出』を作成した経緯がまえがきとあとがきの中に述べられている。文集『荒川重理先生の思い出』に目を通すことにより、荒川が別府大学以前に豊富な教育経験を有していたことがわかった。その実績を買われて、荒川が別府大学短期大学部の初代学部長に就任したことが伺える。後述するように、文集『荒川重理先生の思い出』の「第二部　先生の思い出」のなかには台北高校の160名の卒業生からの追悼文が寄せられている。

荒川が昭和22年（1947）に台湾から帰国した際に、大分にあった荒川勝世夫人の親戚の家に滞在している。その後、以前務めていた愛媛県立宇和高等学校から誘いがあり教諭として赴任することになるが、宇和の冬はかなり冷え込むために健康に配慮して、大分の親戚が別府に別荘を建

てた際に再び大分に戻ることになる。丁度その頃、別府女子大学が開設されて、荒川は昭和27年（1952）別府女子大学に赴任することになったようだ。荒川が大学を離れた後、短期大学部の６期生までが荒川夫妻を囲んでの同窓会に参加していたことが文集『荒川重理先生の思い出』の別府大学の卒業生の追悼文で確認できる。荒川は昭和51年（1976）に92歳で別府にて逝去した。

２　札幌農学校と荒川重理

「荒川重理先生略年譜」にあるとおり、荒川は、「少年よ、大志を抱け」のクラーク博士で知られる札幌農学校の出身であった。別府大学に昭和32年（1957）まで在籍していた土屋工助教授の恩師であった京都大学農学部の木原均（きはらひとし）（1893－1986）もまた札幌農学校の出身である。荒川は木原とは年が離れており（荒川が９歳年上）、木原が入学する前にすでに荒川は札幌を離れていたので、札幌農学校（木原の時代は東北帝国大学農科大学に名称変更しており、さらに北海道帝国大学に変更）において直接の面識はなかったと思われる。しかし、荒川と木原は札幌農学校出身なので、荒川の別府大学への赴任にあたって、木原の弟子であった土屋氏が何らかの役割を担っていたのではないだろうか。文集『荒川重理先生の思い出』のなかの土屋の寄稿文には、荒川を慕う土屋が、大学だけでなく、荒川の自宅にも通って熱心に話を伺っていた様子が描かれている。寄稿文を通して土屋の先輩農学者としての荒川に対する畏敬の念が窺える。

荒川は、当時ドイツ留学から帰国したばかりで札幌農学校で昆虫学教室を主宰する、松村松年（まつむらしょうねん）教授（1872－1960）に師事している。松村教授は、日本の近代昆虫学の創始者として名高い[6]。また、京都大学教授の木原均が２代目の所長として兼任した三島の国立遺伝学研究所の初代所長を務めたのは、松村教授の研究室で荒川と共に昆虫学を学んだ小熊捍（おぐままもる）（1885－1971）博士であった。

札幌農学校は北海道大学の前身であり、明治９年（1876）に日本で初めて学士の授与をおこなう高等教育機関として開校した歴史の古い学校である。マサチューセッツ農科大学の学長を務めたクラーク博士が校長として赴任して一年間の滞在期間に、一期生の教え子たちに多くの影響を残している。一期生のなかには、荒川の叔父の荒川重秀（あらかわしげひで）も含まれる。二期生にはキリスト教思想家の内村鑑三、『武士道』などの著作で知られる新渡戸稲造などがいた。小説家の有島武郎は19期生で札幌農学校を卒業後留学し、札幌農学校から改称した東北帝国大学農科大学で英語講師を務めた。木原均は、東北帝国大学農科大学時代に教えを受けた有島武郎に大きな影響を受けている[7]。札幌農学校の出身者の一期生と二期生たちは、農学校出身という特殊性にもかかわらず、明治以降の近代日本の農学以外の教育をはじめとする広い分野に大きな影響を及ぼしている。また、クラーク博士の影響を受けて、一期生と二期生の多くがキリスト教の信者になっている。荒川もまた生涯に渡ってキリスト教の熱心な信者であった。

荒川は、明治36年（1903）に札幌農学校農芸科に選科生として入学し、松村教授のもとで昆虫学を学び、明治39年（1906）に卒業し、札幌農学校が東北帝国大学農科大学に名称変更した明治40年（1907）に松村教授の研究室の助手に採用された。ところが、体調を崩して結核に罹患したため、南の八丈島で半年間療養した後、明治43年（1910）に休職していた大学を辞して愛媛県の東宇和郡立宇和農蚕学校に教諭として赴任することになる。

荒川は松村教授の研究室の本科生で、荒川と同じキリスト教の信者であった桑山茂（1882－1912）と意気投合し、二人で協力して昆虫学に関する啓蒙書の『趣味の昆蟲界』を書こうと誓ったが、荒川が結核療養のため札幌を離れることになり、さらに荒川より先に湘南で療養をしていた桑山が結核で先立ってしまったことから、二人の『趣味の昆蟲界』出版の計画が頓挫してしま

う。悲報を受けた荒川は『趣味の昆蟲界』出版を放棄しかけていたが、桑山の弟の桑山覚（くわやまさとる）氏（1897－1981）から桑山茂が手記して遺した企画目録を受け取ったことにより、再び奮起して３年の歳月をかけて『趣味の昆蟲界』を完成させる。こうして『趣味の昆蟲界』は桑山の死後６年の歳月をかけて世に出ることになる。文集『荒川重理先生の思い出』には桑山覚氏から「札幌時代の荒川さんのおもかげ」が献じられており、そのなかに荒川との思い出が記されているが、これは荒川の台北高校時代の教え子たちと台北高校同窓会の蕉葉会が『趣味の昆蟲界』をもとにして北海道の桑山覚氏を探し出して、当時入院中であった桑山覚氏から聞き取った貴重な資料である。桑山覚氏もまた、兄や荒川と同じく東北帝国大学農科大学の松村松年教授の研究室で学び、北海道農業試験場で昆虫学の研究を行っていた著名な昆虫学者であった[(8)]。

荒川は、新渡戸稲造が経済的理由などで学校に行けない人たちのために私費で明治27年（1894）に設立した遠友夜学校で国語と理科を教えている。無給での奉仕のためボランティアであるが、札幌農学校での午前の授業と午後の研究室での仕事が終わった後に、初等中等教育を担う遠友夜学校で夜６時から９時まで教えるために歩いて１里（約４km）を往復しなければならなかった。冬場の札幌農学校と遠友夜学校との徒歩での往復は大変だったことが荒川の「思い出の記」のなかで回想されており、荒川の叔父の重平が危惧していたとおり、荒川は体調を崩して結核に罹患してしまう。しかし、この遠友夜学校での貴重な教育経験が荒川のその後の教育活動に大きな影響を及ぼすことになる。東北帝国大学農科大学時代には、木原均も荒川と同様に遠友夜学校で教えていたようだ[(7)]。後に荒川は、遠友夜学校で教えていた時に知り合った末光績からの誘いによって、末光が校長代理を務めていた東宇和郡立宇和農蚕学校に赴任することになる。

３　文集『荒川重理先生の思い出』

文集『荒川重理先生の思い出』のあとがきに以下のような記述がある。

荒川先生の思い出の文集を出そうという話があってから、先生の書き遺されたものを求めて、別府のお宅に伺った。

奥さまの話では、日記や書籍などは全部台湾に置いてきたので、少々の写真と、こちらに帰ってきてから集めた本しか残っていないとのことであった。それでも「何かのために自分のことでも書いておいたらどうですかと言いましたら、なにやらノートに書きつけておったようでした」と申されながら出してこられたのが、先生が八十歳の頃に書き留められた「思い出の記」であった。

「思い出の記」は小型の大学ノートに、約50ページにわたってこまごまと書き込んであり、生い立ちから台湾引揚げまでのことが述べてある。幼少の頃のことなどは、殊に克明に書かれていて、なにか資料でも残しておられたのかと思うほどである。先生が自分のことを語られた唯一のものであるので、ぜひ読んでいただきたいと思ったが、全文を掲載するのはむりであったので、前半の三分の一に止めざるを得なかった。

蔵書は、別府大学の図書館に寄贈されたとのことであったので、さっそく図書館に出向いて調べさせてもらうことにした。図書館では目録が作成してあり、すぐに目を通すことができた。その中に、荒川重理著「趣味の昆虫界」大正七年と記載があり、はじめはわが目を疑ったくらいであった。なにはともあれ、その書物を取り出してきてもらった。手にとってみて驚いたことには、表紙はすり切れ、色はあせているが、なんと400ページにもなる大冊であった。おそらく、先生がいつも手許に置いておられたと思われるもので、本文が見えなくなるほど赤

インクの書き込みがなされている。私にとっては予想もしなかった発見であったので、早くこのことを在京の諸兄に伝えたいと、気もそぞろになったくらいであった。

「趣味の昆虫界」は先生の畢生（ひっせい）の著作であり、これこそかけがえのない資料であるが、なにしろ400ページの大冊であり、やや専門的な文書であるので、この著作が生まれたいきさつが書いてある自序と、内容をうかがわせる短い章を数編、紹介することとなった。

文集『荒川重理先生の思い出』は、『趣味の昆蟲界』の抜粋、荒川の大学ノートの『思い出の記』などの荒川の著作に加えて、12頁に及ぶ荒川の貴重な写真（図２、３）、160を超える教え子たちなどの追悼文の他に、荒川の死後の勝世夫人と教え子たちとの別府での座談会（奥さまの語る先生）など246頁からなり、教え子たちの恩師に対しての感謝の念と荒川夫妻への愛情が織り込まれた労作となっている。特に貴重な資料といえる、亀川にあった荒川の自宅での勝世夫人と台北高校と別府大学短期大学部の教え子たちとの座談会では、『次郎物語』の作者として知られる下村湖人（1884－1955）の次男の下村覚（しもむらさとる）氏が加わっている。これは、台北高校の三沢糾（みさわただす）校長の後任であった湖人が、学校で起こった事件の処理をめぐる責任をとって辞職し、五人の子供を含む家族と台湾を去る際に、湖人と親しかった荒川が自ら申し出て、荒川夫妻に懐いていた当時尋常科一年の覚氏を自宅で預かって一年間面倒を見た関係で、覚氏が台湾から父のいる東京に戻った後も荒川夫妻との交流が続いていたためである[9]。このようにして荒川の台北高校時代の教え子たちが尽力して一年で完成させた文集『荒川重理先生の思い出』は、巻頭にあるように、勝世夫人に捧げられている。

図２　台北高校時代の荒川重理、
文集『荒川重理先生の思い出』より

図３　昭和25年　宇和、勝世夫人と、
文集『荒川重理先生の思い出』より

４　『趣味の昆蟲界』

『完訳　ファーブル昆虫記』などで知られるフランス文学者奥本大三郎氏の著書の『虫の宇宙誌』（1981）と『虫の文学誌』（2019）の中で、『趣味の昆蟲界』が取り上げられている[10]。奥本氏は、『虫の文学誌』の冒頭で、大学生時代に古書店で見つけて寝床で読みふけっていたと述べている。また、北海道大学大学院農学研究科出身の昆虫学者で、多数の昆虫に関する著書で知られる小西正泰氏は、雑誌『インセクタリゥム』のなかの「虫・人・本－38　文系の昆虫学　荒川重理」（1993）において、荒川の略歴とともに『趣味の昆蟲界』の内容について紹介している[11]。

『趣味の昆蟲界』は大正７年（1918）に警醒社書店より出版されている。警醒社書店は、昭和の戦争中まで存在した日本のプロテスタント系の出版社であった。宗教だけでなく、文芸・科学など様々な分野の啓蒙書を明治時代の中頃から出版していた。札幌農学校出身のキリスト教思想家の内村鑑三の著作を出版したのも警醒社である。荒川の札幌農学校での恩師の松村松年教授による昆虫学の専門書『新日本千蟲図解』も警醒社より出版されていたことから、松村教授の勧めもあって、『趣味の昆蟲界』は警醒社より出版されたものと考えられる。『趣味の昆蟲界』の巻頭

には、実際に松村教授らの励ましに対して感謝が述べられている。文集『荒川重理先生の思い出』のなかにも、『趣味の昆蟲界』のいくつかの部分の引用と、『趣味の昆蟲界』が書かれた経緯についての説明が触れられている。意外にも荒川の教え子たちは、『趣味の昆蟲界』の存在について荒川からは直接聞いていなかったことが文集『荒川重理先生の思い出』にも荒川の人柄とともに触れられている。

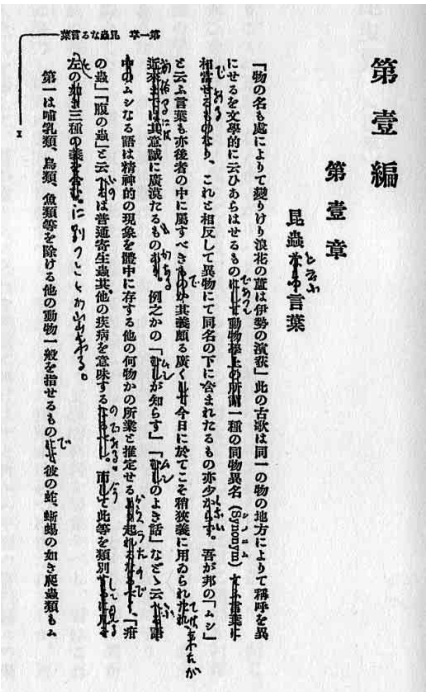
松村松年著の『新日本千蟲図解』の巻尾に以下のような『趣味の昆蟲界』の序文をもとにしたと思われる宣伝文がある。

> 科學者は横の自然を見、文學者は縦の自然を見る、両者は遂に相會ふ能はざるか、著者は札幌に學ぶこと七年斯学の泰斗松村博士に師事し、三宅博士に私淑し、昆蟲學を専攻する傍、東西の文学、哲學に趣味を有し諸書を渉猟して此書を作る。本書の内容は單なる科學書に非ず昆蟲各類の代表的昆蟲を記して形態分類より其生活状態をまで説き苟くも其蟲に関するものは人生との関係は勿論、詩文、傳説、言句の類まで蒐集し更らに之れを、其近類にまで、論及せるを以て一面よりすれば亦實に一種の變態昆蟲學書と云ふを得べし、されば科學者文學者は勿論、一般の子女と雖も興味を以って迎ふる事を得べく三色版寫眞版亦稀れに見る鮮麗のもの、家庭の備品としての価値頗る多し。

昆虫に関しての科学と文学の融合を目的として、単なる専門書としてではなく一般への広く普及を荒川が目指していることが、「趣味の」という語句とともに伺える。実際、大正時代から昭和の初めにおいては「趣味の」とついた啓蒙書が多数出版された時代であった。『趣味の昆蟲界』について、『インセクタリゥム』の「文系の昆虫学　荒川重理」で小西氏は以下のように紹介している。

> この本は本文392頁の大冊で、背表紙表題は金文字のぜいたくな装丁です。本書はポピュラーな昆虫（主要な目（もく）のすべて）の生態を概説するとともにその昆虫にまつわる文学（詩歌、俳句など）や民俗などを古今東西の資料から集成したものです。つまり、「文系の昆虫学」とも称すべき内容で、今日まで類書はありません。
>
> 本書の成立には、前出の学友・桑山茂が深くかかわっています。すなわち、二人で協力してこのような本を書こうと固く約束を交わしていたのですが、それに着手する前に、桑山が胸を病んで夭折（ようせつ）したので、荒川が単独で３年の歳月をついやしてその責をはたしたのです。
>
> その構成は、第壱篇が「総論」３章で昆虫の概論、第弐篇は「各論」で21章から成っています。全巻、美文調の文語体で書かれており、いまの世代にはなじみにくいかもしれません。例えば「蛍」の章の導入部は、こういう調子です。「夕べ涼しき野川の辺りに、星光に飾られし夜の空をいたゞきつゝ、黒く沈める地に包まれて立てる時、闇を縫ふ螢火二三、そここゝに点じて優しき声の其寂けさを破りつゝ響けば詩人ならぬ何人も、此納涼の幸ある国に生れし幸ひを味ふなるべし。・・・・・・」。
>
> また、桑山茂が研究途次にあったトビケラの章では「亡き友を偲びてしばしたゝずめば　水の上とぶトビケラあはれ」と自作の歌で友を悼んだり、しばしば英詩を対訳したりしています。このようなところに、荒川の並みならぬ文才がうかがわれます。なお、荒川はこの本の増訂を期していたらしく、赤インクでびっしりと書き込みのある手沢本（しゅたくぼん）が終焉（しゅうえん）の地の別府大学図書館に遺贈されているそうです。

大正11年（1922）に大杉栄による初めての日本語訳が出版された『ファーブル昆虫記』の第一巻よりも４年前に『趣味の昆蟲界』は出版されている。『ファーブル昆虫記』はジャン・アンリ・ファーブルの代表作で、1878年から1907年にかけて昆虫の生態を記した10巻にのぼる『昆虫記』の訳本である。『ファーブル昆虫記』は、大杉栄の死後、第２巻から10巻までの訳本がいくつかの出版社から刊行され、戦後は児童向けのものも含めて世代を渡って広く日本では読みつがれてきた。実際に荒川も台湾の教え子たちに『ファーブル昆虫記』を読むように勧めていた様子が教え子の追悼文の中にも窺える。一方、『趣味の昆蟲界』は、出版元の警醒社が戦中に消滅してしまったので出版が絶えてしまい、奥本氏や荒川の教え子がそうであったように古書店でのみしか戦後は入手できなくなっていた。荒川から別府大学図書館に遺贈されていた、書き込みのある『趣味の昆蟲界』の第一章の書き出し部分の写しが文集『荒川重理先生の思い出』の第一部の冒頭に示してあるが（図４）、美文調の文語体の口語体への修正を荒川が熱心に行っていた様子が窺える。


第壹編

第壹章

昆蟲ト言葉

「物の名も處によりて變りけり浪花の蘆は伊勢の濱荻」此の古歌は同一の物の地方によりて稱呼を異にせるを文學的に云ひあらはせるものにして動物學上の所謂一種の同物異名（synonym）なり。吾が邦の「ムシ」相當せるものなり。これと相反して異物にて同名の下に含まれたるもの亦少なからず。

と云ふ言葉も亦後者の中に屬すべきものにして其義頗る廣く昆虫今日に於てこそ狭義に用ゐられ居れ

第一章　昆蟲なる言葉

第一は哺乳類、鳥類、魚類等を除ける他の動物一般を指せるもの

図４　書き込みのある『趣味の昆蟲界』の第一章の書き出し、文集『荒川重理先生の思い出』より

小西氏が述べているように、昆虫に関する著書は、『趣味の昆蟲界』が出版されるまでには、ギフチョウの命名者で「昆虫翁」として知られていた名和靖（なわやすし）、荒川の恩師の松村松年、『趣味の昆蟲界』の序文を提供し、荒川が私淑していた三宅恒方（みやけつねたか）などの著作はあったものの、「文系の昆虫学」と小西氏が名付けたように、昆虫の生態だけでなく、昆虫に関しての科学と文学の融合を目的としたものは『趣味の昆蟲界』がはじめてであった。小西氏が指摘している英詩の対訳とは、200年前のロマン派の詩人ジョン・キーツの昆虫に関する詩に関してのことで、前出の奥本大三郎氏の著作にも取り上げられている。

５　『思い出の記』

荒川の大学ノートの『思い出の記』は、「思い出の記（抄）」として文集『荒川重理先生の思い出』の第三部の冒頭に収められている。あとがきにある通り、大学ノート約50ページにわたる『思い出の記』には、生い立ちから台湾引揚げまでのことが述べてある。そのうちの前半の三分の一が「思い出の記（抄）」である。「思い出の記（抄）」には生い立ちから八丈島での病気療養後、東北帝国大学農科大学の助手を辞して、四国の農学校に務めることを決心するまでが記されている。

「思い出の記（抄）」によると、荒川は明治17年（1884）に東京本所緑町の旧幕臣の旗本の家に長男として生まれた。荒川の父は日本鉄道（日本初の民営鉄道会社）の技師で、叔父の荒川重平（あらかわじゅうへい）（父の次の弟）は海軍兵学校卒、海軍大学教授の数学者。叔父の荒川重秀（父の三番目の弟）は札幌農学校第一期卒業生の総代を務めた俊英で、クラーク博士に直接指導を受けた１回生卒業生13名の中の一人であった。

荒川は中学の時に転校して築地立教中学に進み、学寮に入り大きな影響を受けることになる。立教中学時代に受洗して荒川はクリスチャンとなったが、まだ当時は宗教に対しての信仰は幼稚で聖書の探求もそう深刻なものではなかったという。築地での生活について荒川は以下のように述べている。

> しかし、この築地の生活は、私を功名心とか、名誉とか、権勢とか、当時学生の間にはやって居た末は博士か大臣かと云うあの出世主義に反抗し、自由に個性を活かし、大自然の中に生くる楽しみを至上のものとする思想に傾向するようになり、同級中の秀才前田多門君（近衛内閣の文部大臣となり、又日本育英会の会長を勤めた人物）等が一校を目ざして猛烈に勉強するのをむしろ白眼視して、ロングフェローをよみ、ワーズワースの詩や内村鑑三氏の愛吟や蘆花の自然と人生なぞをよみ耽って、受験勉強なぞは夢にも考えなかった。そこでいよいよ卒業の前、私は叔父重平に呼ばれ、どこを受験するかと問い質されたが、即答もできなかった。叔父はやはり一高か然らずんば三高を受験せよとの希望であったが、丁度その頃有島武郎氏が米国留学からの帰途立教学院で講演されたリヴングストーン伝に感銘した私は、早速叔父に札幌農学校行を申出た。しかし重秀叔父がその第一期であり乍ら農学をすてたいきさつを知って居られるので、健康のためにも亦将来のために札幌行を強く反対されたが、丁度父は北海道旭川の保線事務所下富良野出張所長として、当時下富良野から十勝帯広へ通ずる鉄道新設工事の落合トンネルと狩勝峠測量の大任を負って下富良野に住んで居たので、父は早速賛成して、これで私の札幌行は決った。

さらに東京を離れて札幌で荒川の反逆心があらわれるようすが以下の文に窺える。

> 札幌には、同校第一回卒の重秀叔父の同級であった佐藤昌介博士が校長であり、二回の南鷹次郎博士が農学部長、宮部金吾博士が植物学教授として植物病理学の権威者であった。そして三月立教中学卒業と同時に私は札幌に赴き、佐藤先生を御訪ねした。そして私は健康上、長期の在学は無理であり、又学力の自信もないので、選科に在籍したいと申出た処、先生は極力反対され、是非本科に受験せよと勧告されたが、私は心の中で例の反逆心がむくむくと起って、遂に選科へ願書を提出し、生物学科を選んだ。当時札幌には植物には病理学の権威宮部博士が居られ、動物学には八田三郎博士がトカゲの研究をされて居られたが、爬虫の嫌いな私は、むしろ昆虫学で新進の学者で日本ではじめて昆虫学講座を開かれた松村松年博士の下で昆虫学を学ぶことにきめた。

「思い出の記（抄）」は、荒川が別府大学を退職後80歳のときに勝世夫人に勧められて大学ノートに書き残した荒川の自叙伝といえる。戦後の台湾から引き上げの際に、荒川の蔵書と日記などはすべて台湾に残してきたので、荒川の記憶をもとにして書き上げたものであるが、描写も生き生きとして人名や地名など詳細に渡っており、荒川の優れた記憶力を反映したものといえる。『思い出の記』には、生い立ちから台湾引揚げまでのことが述べてあり、そのうちの前半の三分の一が「思い出の記（抄）」として文集『荒川重理先生の思い出』に収められている。荒川の『思い出の記』の大学ノートが見つかれば、台湾から引き上げるまでの荒川について新事実などが明らかになるに違いない。今後の調査に期待したい。

６　教育者としての荒川重理

小西氏は、前出の「文系の昆虫学　荒川重理」で以下のように結んでいる。

上に述べてきた教育機関（特に台湾時代）において、荒川は教え子たちに「おさかな」（オチャカナ）と愛称されて慈父のように敬慕され、真の師弟愛がはぐくまれていたのです。そのようすは荒川重理先生の思い出（1977）の全巻をおおっており、教育者はかくあるべきかと、深い感動をおぼえます。荒川は１冊の名著と、そして多くの教え子たちを遺したのです。

荒川が昭和２年（1927）から昭和22年（1947）の台湾時代に主に過ごしたのは、日本の支配下にあった台湾に大正11年（1922）に設立された７年制の台北高校である。日本本土以外では初であり台湾では唯一の高等学校で、修業年限４年の尋常科と、同じく３年の文科と理科の高等科からなっていた。７年制の旧制高校は本土でも珍しかった。卒業生はほとんどが日本人であったが台湾人も少数おり、台湾人にとって入学の難易度は非常に高かった。荒川は台北高校の教諭兼助教授を昭和２年（1927）から、昭和６年（1931）からは教諭兼教授を昭和18年（1943）まで務めた。専門は動物学で、尋常科で一般生物、動物学、生理衛生、修養の授業を、そして高等科で動物学と解剖実験の授業を担当している。さらに台北高校を辞するまで尋常科寄宿舎の舎監を務めている。台北高校での18年間の教え子は、荒川が生涯指導した教え子のうち約半分の1,800名にのぼる。台北高校は国立台湾師範学校として継承され、当時の貴重な資料なども、ほとんどの建物と同様に現在も大切に保存されている。日本では忘れられた存在である荒川の当時の貴重な写真なども、インターネット上で確認できる。荒川以外の台北高校の日本人教員に関しても、日本語よりも台湾からの中国語の資料がネット上に多く見受けられる。

荒川が台湾に渡るきっかけとなったのは、台北高校の高等科の初代校長となる三沢糾が浜松高等工業学校の荒川のもとを訪れて熱心に勧誘したためであった。高齢であった父の希望で愛媛を離れて実家の東京に近い栃木に、次に親戚が校長を務める浜松で荒川は教えていた。長男だった荒川は台湾行きを躊躇して三沢校長の勧誘を一度は断ったが、荒川の意を汲んだ父親の説得により、内心では望んでいた台湾行きを一転して決意することになる。また、荒川が浜松で教えていた大正12年（1923）９月には、東京の本所緑町にあった荒川の実家は関東大震災により発生した大火災の影響を受けている。さらに、戦災によって跡形もなくなったと荒川は述べている。

荒川は台北高校で昭和２年（1927）から教えることになるが、昭和18年（1943）に突然職を辞している。教え子達の前では停年退職の挨拶を行っていたが、実は戦局が悪化していた頃に行われるようになった竹槍の訓練をさぼっていることを当時の校長に厳しく咎められての罷免であった。この経緯については、勝世夫人が座談会の中で教え子たちに荒川から生前固く口止めされていた話として披露している。それ以前の栃木県の農業高校の教諭のときにも、荒川は学校内で不法に物資が横流しされていることに腹を立てて病気を理由に辞任している。荒川は、教え子たちがいたずらをしてもほとんど怒ったことがないというほど温厚な性格である一方で、理不尽な出来事に対しては猛烈に反発する性格であったことが窺える。台北高校の教え子の一人は世の中で最もこわい人は荒川先生だと語っているが、正義のためには何者も恐れずに立ち向かう気魄がこもっていたためと述べている。

荒川と勝世夫人との間には子供がなかったが、荒川夫妻はいつも一緒のおしどり夫婦として有名だった。これは別府に移ってからも同様だった。寮に居た尋常科の教え子たちは、荒川の自宅

をよく訪れて夫妻も喜んで受け入れていた。荒川夫妻は台北高校の尋常科の教え子たちに対して等しく自分たちの子供のように接していた。そして教え子たちの将来についても親身になって相談に乗っていた。

三沢校長時代の台湾総督府所管学校の台北高校では、南国の独特の雰囲気のもと、自由と自主を重んじる校風で、自由主義の学生個人の個性を伸ばす教育が行われていた。一方で学生によるストライキなどのトラブルも多かった。荒川が台湾にいた20年間は、昭和６年（1931）に満州事変、昭和12年（1937）から日中戦争、昭和16年（1941）から昭和20年（1945）まで太平洋戦争、そして戦後の台湾の中華民国による接収というように、日本の歴史の中でも戦争が長い間続いた大変な時代で、これは日本の統治下の台湾でも同様であった。荒川が赴任した当時の三沢校長の時代には自由な校風であった台北高校も、徐々に戦争の影響を受けて、太平洋戦争の後半は自由な雰囲気は失われ軍国主義に染まっていった。敬虔なクリスチャンであった荒川にとって非常に辛い時代であったと思われる。世の中の流れに反抗して、荒川は台北高校で三沢校長が目ざした自由と自主を重んじる、自由主義の学生個人の個性を伸ばす教育を続けていった。そうした荒川に対して反発し厳しい態度を示す教員や、荒川のすべての学生に対して平等で人間性を重視する優しい態度に物足りなく感じる学生も多くなっていく。

台湾時代のエピソードとして、教え子の一人が文集『荒川重理先生の思い出』の追悼文の中で以下のように述べている。

> さて大正末期に高等科に入学した私は、初めに神谷教授から動植物学の講義を聴き、卒業の年から荒川先生の顕微鏡実習を受けた。
> 荒川先生が尋常科教諭として初めて着任したのは昭和二年の頃であったと思うが、同時に高等科助教授をも兼任されたので、私のクラスが恐らく最初に実習の指導を受けたのではなかろうか。その当時の先生は未だ赴任後の日が浅かったためか、高等科に対しては何となく遠慮勝ちに振舞われていたように記憶している。
> 卒業が近づいた或る日、私は同級生の昆虫博士こと鹿野忠雄君等と共に荒川先生を囲んで雑談を交わしたことがある。その時に先生から聞かされた話は今でも記憶に新しい。
> 「生物学専攻には物理と化学の他、少なくとも文献を調べるための語学力が大切。フランス語でも何でもよいが、母国語と同じく自然に口から出る外国語を一つ持つことは最大の武器だ。将来の生物学や医学の研究には高度の基礎学の素養が絶対に欠かせない。基礎が堅固な程、その上に立派な高層建築が建つ。」と説かれた。
> この御高説は、今でも尚誠に正当な拳々服膺に値する至言であった。私は高校時代に生物学への興味を誘い、発奮の起動力与えて下さった良師に巡り会えたことを、人生最大の悦びと感謝している。

これは、文集『荒川重理先生の思い出』の題字を担当し、台北高校同窓会の蕉葉会の会長を務めた大越伸氏による追悼文の一部である。その中で出てくる大越氏の同級生の鹿野忠雄（1906－1945）は登山家として、動物学そして文化人類学の研究で国際的に知られた人物で、東京で台北高校が設立されることを知って台北高校尋常科に入学後、ほとんど授業に出ることなく、台湾の山岳地や紅頭嶼（こうとうしょ）などで昆虫などの動物の採集や文化人類学的な調査を続けていた[12]。今では考えられないが、三沢校長と荒川は鹿野の才能を見抜いて、出席日数が足りず卒業できるはずがないにも関わらず、便宜を図って一年おきに進級させて卒業させた。その経緯は他の教え子の追悼文にも述べられている。こうして無事に卒業した鹿野は東京帝大に進学し、台湾での調査を続け

て動物学と文化人類学上の多くの業績を残した。興味深いことに、荒川の教え子達は、荒川が昆虫学者で、『趣味の昆蟲界』を書いたことを当時は全く知らなかった。荒川は、その性格からか、それを意図して伝えていなかったと思われる。大学に進学して昆虫学者を目ざした野村健一氏（後に千葉大学名誉教授）は、卒業後に『趣味の昆蟲界』を知って、台北高校時代に昆虫学について荒川から学んでおきたかったと後悔の念を述べているほどである。鹿野忠雄は、戦争末期のボルネオで調査中に行方不明になるが、同様であっただろう。台北高校時代の野村氏は、隣接する台北帝国大学の昆虫学者の素木得一（しらきとくいち）（1882－1970）教授の研究室の研究会に参加しており、その研究会にいつも荒川が参加していたことに気づいていたが、当時はその理由を知らなかった。素木は札幌農学校の松村松年教授の研究室に在籍した荒川の先輩で、台北高校と台北帝国大学と所属は違ったものの、台湾において終戦までの20年間をともに過ごした。荒川は台北高校を辞職して後、素木が在籍した台北帝国大学農学部に講師として採用され、戦後に改称された国立台湾大学の教授となり、留用解除まで素木とともに台湾にとどまっている(13)。

160を超える台北高校時代の教え子たちの追悼文は、初期の卒業生のものはほとんどが楽しい思い出として記されているのに対して、戦争が始まり戦局が悪化するにつれて、徐々に重い雰囲気が感じられてくる。ただ、追悼文に共通して感じられることは、教員そして尋常科寄宿舎の舎監でもあった荒川が教え子たちの人格を尊重して、自分と対等に接して、愛情をもってそれぞれの個性を伸ばして、将来最適な進路へ導くことに努めていたことである。

荒川の教え子たちの将来については、日本各地の帝国大学に進学後、文系の進学者は法律関係の仕事、理系の進学者は医者になったものが多い。また、台湾人の教え子たちも同様であった。荒川が別府に引っ越してからも、大分在住の裁判所に務めているものや開業医になった教え子たちが別府の荒川の自宅を頻繁に訪れている。また、日本各地から、そして台湾からも卒業生が度々別府の自宅を訪問し、台北高校の同級生のクラス会が開かれる際は、荒川夫妻がクラス会の会場の別府のホテルに招かれている。これは荒川の別府大学退職後も継続して行われていた。台北高校の卒業生が別府を訪問する際や、同級生のクラス会が行われる際に世話役を務めていたのが、別府での最初の入居先であった親戚の家が所在する上田の湯近くの岡本医院の岡本芳生氏であった。岡本氏は、別府で恩師荒川の主治医として最後まで健康と体調管理に気を配っていた。文集『荒川重理先生の思い出』のなかの教え子による追悼文の最後に岡本氏が台北高校同窓会の蕉葉会代表として弔辞を捧げている。

おわりに

文集『荒川重理先生の思い出』は、別府大学名誉教授の荒川重理氏が優れた教育者であったことを物語る貴重な資料であるといえる。文集『荒川重理先生の思い出』が書かれた昭和52年（1977）は、別府大学が開設30周年を迎えようとしていた節目の時期であった。文集『荒川重理先生の思い出』のあとがきのなかに、当時の別府大学附属図書館長の賀来軍次郎教授が「荒川重理先生略年譜」の作成に協力したことが述べられており、開設30周年の記念行事の準備の多忙な中で、「荒川先生の会」の荒川に関する情報収集に協力を惜しまなかった様子が伺える。

荒川は、札幌の東北帝国大学農科大学の松村松年教授の研究室の助手となったが、しばらくして病気療養のために研究室を離れて療養し、回復後そのまま退職する。そのために札幌での助手としての研究期間は実質３年に満たない。東北帝国大学農科大学を退職後は、荒川は研究よりはむしろ教育活動に軸足を移すようになる。そこで研究者としての荒川がどうだったのか気になるところであるが、温厚で学生に対しては優しく接していた荒川は研究に関しては厳しかったよう

である。荒川の、最も有名な研究業績として、勝世夫人の実家のある愛媛の東宇和郡立農蚕学校時代に、当時昆虫学の和文の唯一の専門誌であった『昆虫世界』に「家鶏の新害虫オホヌカカ（*Ceratopogon arakanae* Mats）に就いて」と題した報告が明治43年（1910）に荒川の名前で発表されている。これは、『趣味の昆蟲界』の抜粋や他の荒川の著作とともに文集『荒川重理先生の思い出』のなかの第一部の「遺文」のなかに収められている。オホヌカカ（現在の和名はニワトリヌカカ）は松村教授の判定により新種であることがわかり、学名は *Culicoides arakawae* Arakawa と最初の発表から変わっているが現在も残っている[14]。ニワトリヌカカは、ニワトリに寄生虫が原因となるロイコチトゾーン病を媒介することが後に判明し、ロイコチトゾーン病は養鶏業で重要な感染症として知られている。ロイコチトゾーン病を媒介するニワトリヌカカの第一発見者として荒川の名がいまでも学名として残っていることになる。これは取りも直さず荒川が類稀な教育者であるとともに、優れた観察力を有する研究者であった証拠の一例であると言えるのではないだろうか。

荒川は、東北帝国大学農科大学での助手の時に不幸にして病にかかり辞職してからは、自分の専門の昆虫学の研究から軸足を移して教育活動に深く携わることになる。明治43年（1910）から昭和38年（1963）の約50年間に、荒川は主に生物学（動物学）の教育を通して文系から理系までの広い分野の人材育成に尽力した。荒川の教え子たちは、社会に出てそれぞれの分野のリーダーとなり日本や台湾の国の発展に貢献してきた。別府大学においても荒川は初代短期大学部長として人材育成に務めるとともに、創成期にあった別府大学の基礎を固めるうえで重要な役割を果たした。別府大学の前身の別府女子専門学校の創立者佐藤義詮学長による建学の精神の「真理はわれらを自由にする」は、真理を追究し自由を愛する自立した若者を育てることを意味し、台北高校で三沢校長が目ざした自由と自主を重んじる、自由主義の学生個人の個性を伸ばす教育を荒川が続けてきたことと一致している。このような教育理念は、別府大学の生物学教室にいた土屋工氏がコロラド州立大学で[15]、別府大学では別府大学名誉教授の二宮淳一郎氏によって受け継がれていくことになる。

注

（1）別府大学学長　飯沼賢司、「創立者佐藤義詮の建学への思いを訪ねて―新制大学創立70周年記念特集刊行を終えて―」、『別府大学紀要』62、99-103、(2021)

（2）二宮淳一郎、「学長を囲んだ人々」、佐藤義詮先生を偲ぶ会編、『真理と自由：佐藤義詮先生十回忌記念』、平成９年３月30日発行、51-56、(1997)

（3）吉岡義信　編集、『新聞記事に見る別府大学の歩み―昭和21年（1946）～昭和40年（1965）―』、2015年３月１日、(2015)

（4）荒川先生の会、『荒川重理先生の思い出』、昭和52年７月24日発行（1977）

（5）三十周年記念誌編集委員会　編集、「文学部と短期大学部の発展」、『別府大学の三十年』、昭和53年３月20日発行、(1978)；　佐藤学園八十年記念誌編纂委員会　編集、『学校法人　佐藤学園の八十年』、昭和62年９月１日発行、(1987)

（6）小西正泰、「日本昆虫学の開祖　松村松年」、「第３章　虫と人物と著作と」、『虫と人と本』、(2007)

（7）木原ゆり子、北海道大学総合博物館　ボランティアニュース　「木原　均先生小伝」　～研究と探検とスポーツと～、抜粋特別号　2015年６月１日、(2015)
https://www.yokohama-cu.ac.jp/kihara/kinen/cjhmbp0000000err-att/vnews_kihara_201506. pdf

（8）中島敏夫、「桑山覚先生の逝去を悼む」、『昆蟲』50（２）、348-349、(1982)

（9）宮島傳二郎、「下村湖人を偲ぶ」、宮島醤油ホームページ　会長コラム、2010年10月、(2010)
https://www.miyajima-soy.co.jp/backnumber/denjiro/denjiro088/denjiro088. htm

；「作家―下村徹―父「下村湖人」の背中を見ながら」、取材：アートセンターサカモト・ビオス編集室／2017年11月29日、（2017）http://www.bios-japan.jp/bios40. html

（10）奥本大三郎、「聴ケドモ聞コエズ」、『虫の宇宙誌』、（1981）；奥本大三郎、「読書の喜び」、第８章　「キーツのキリギリス」、第９章　「蝗害の世界席巻年譜」、第13章　「ギリシャのセミの詩」、『虫の文学誌』、（2019）

（11）小西正泰、「虫・人・本－38　文系の昆虫学　荒川重理」、『インセクタリゥム』、（1993）；小西正泰、「文系の昆虫学　荒川重理」、「第３章　虫と人物と著作と」、『虫と人と本』、（2007）

（12）奥本大三郎、「サラマオのモンシロチョウ」、『虫の宇宙誌』、（1981）

（13）小西正泰、「台湾昆虫学の開祖　素木得一」、「第３章　虫と人物と著作と」、『虫と人と本』、（2007）

（14）荒川重理、「家鶏の新害虫オホヌカカ（*Ceratopogon arakanae* Mats）に就いて）」、『昆虫世界』14（156）、411-414、（1910）；　秋葉和温、「鶏のロイコチトゾーン症の研究史における暗中模索からの脱出記録(25)」、『畜産の研究』68巻７号、771-776、2014年７月、（2014）

（15）大坪素秋、「土屋工と大麦ゲノム研究」、『別府大学紀要』62、xxxi、（2021）

参考文献

飯沼賢司「創立者佐藤義詮の建学への思いを訪ねて―新制大学創立70周年記念特集刊行を終えて―」、『別府大学紀要』62、99-103（2021）

二宮淳一郎「学長を囲んだ人々」、佐藤義詮先生を偲ぶ会編『真理と自由：佐藤義詮先生十回忌記念』、平成９年３月30日発行、51-56（1997）

吉岡義信編『新聞記事に見る別府大学の歩み―昭和21年（1946）～昭和40年（1965）―』、2015年３月１日（2015）

荒川先生の会『荒川重理先生の思い出』、昭和52年７月24日発行（1977）

三十周年記念誌編集委員会編「文学部と短期大学部の発展」、『別府大学の三十年』、昭和53年３月20日発行（1978）

佐藤学園八十年記念誌編纂委員会編『学校法人　佐藤学園の八十年』、昭和62年９月１日発行（1987）

小西正泰「日本昆虫学の開祖　松村松年」、「第３章　虫と人物と著作と」、『虫と人と本』（2007）

木原ゆり子「木原均先生小伝～研究と探検とスポーツと～」、北海道大学総合博物館　ボランティアニュース　抜粋特別号　2015年６月１日（2015）

https://www.yokohama-cu.ac.jp/kihara/kinen/cjhmbp0000000err-att/vnews_kihara_201506. pdf（閲覧日　2022年１月22日）

中島敏夫「桑山覚先生の逝去を悼む」、『昆蟲』50（２）、348-349（1982）

宮島傳二郎「下村湖人を偲ぶ」、宮島醤油ホームページ　会長コラム、2010年10月（2010）

https://www.miyajima-soy.co.jp/backnumber/denjiro/denjiro088/denjiro088. htm（閲覧日　2022年１月22日）

「作家―下村徹―父「下村湖人」の背中を見ながら」、取材：アートセンターサカモト・ビオス編集室／2017年11月29日（2017）http://www.bios-japan.jp/bios40. html（閲覧日　2022年１月22日）

奥本大三郎「聴ケドモ聞コエズ」、『虫の宇宙誌』、（1981）

奥本大三郎「読書の喜び」、「第８章　キーツのキリギリス」、「第９章　蝗害の世界席巻年譜」、「第13章　ギリシャのセミの詩」、『虫の文学誌』（2019）

小西正泰「虫・人・本－38　文系の昆虫学　荒川重理」、『インセクタリゥム』（1993）

小西正泰、「文系の昆虫学　荒川重理」、「第３章　虫と人物と著作と」、『虫と人と本』（2007）

奥本大三郎「サラマオのモンシロチョウ」、『虫の宇宙誌』（1981）

小西正泰「台湾昆虫学の開祖　素木得一」、「第３章　虫と人物と著作と」、『虫と人と本』（2007）

荒川重理「家鶏の新害虫オホヌカカ（*Ceratopogon arakanae* Mats）に就いて）」、『昆虫世界』14（156）、411-414、（1910）

秋葉和温「鶏のロイコチトゾーン症の研究史における暗中模索からの脱出記録（25）」、『畜産の研究』68巻７号、771-776、2014年７月（2014）

大坪素秋「土屋工と大麦ゲノム研究」、『別府大学紀要』62、xxxi（2021）